

<書評>高崎隆治著『一〇〇冊が語る「慰安所」・男のホンネ』日本の軍隊の醜悪を告発

著者	小林 裕子
雑誌名	日本文学誌要
巻	52
ページ	84-85
発行年	1995-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019850

この女性は、美しさを漂わす「生の哀しいやさしさ」を湛えていた。高等小学校の恩師・岩木先生は、人命尊重の思想を教えてください、明解にして美しい人道主義の魂を宿していた。

「天与の良心こそ、人間の花ではないでしようか」——『あとがき』にかえて」に記されたこの言葉は、鈴木氏の、そしてこの本の全体を要約している。「人生いかに生きる

高崎 隆治著

『一〇〇冊が語る「慰安所」・男のホンネ』

日本の軍隊の醜悪を告発

小林 裕子

先ず初めに題名の「男のホンネ」という部分に私はつまづいた。従軍慰安婦をめぐる女性の立場からの激しい抗議を、軽くいなすような内容のものかと早合点したからである。しかし私の予想は大きく外れて、内容は著者の一貫した反戦の志と戦争責任追及の姿勢にまっすぐつながるものであった。

ここに取り上げられた従軍慰安婦問題は、日本政府によって長く実態が隠蔽されていた

か、いかに生きたかが、私の問題だった」氏の、偽りのない人生の歩みは、つまり「美しい魂を尋ねて」歩む氏の生き様は、この本を読む者の心に力を与えてやまない。そしてこの世に警鐘を鳴らしてやまない。

（たけうち ひろし・産経新聞社編集局勤務）

▽一九九四年八月・武蔵野書房・二〇〇〇円

▽著者——一九五一年卒

が、日本の軍隊の直接関与した犯罪行為であることが一九九〇年から一九九二年にかけて実証され、以後今日に至るまで韓国を初めとする国際的非難を浴び続けている。その意味できわめて今日的意義の鮮明な書物といえよう。現時点とのかかわりでいえば、今年三月一日から四月七日まで、ニューヨーク国連本部で女性の地位委員会が開かれた。これは北京で採択される世界女性会議の行動綱領案

を決める会議であるが、ここで性的奴隷制度について、責任者の訴追と完全な補償を求める言葉が綱領案に加えられた。この「性的奴隷」とは従軍慰安婦を指している。

日本政府はこの問題に軍が関与した事実すら容易には認めず、また慰安婦が性的奴隷に等しいという認識も否定している。この書物はそうした政府の責任回避と欺瞞性を、具体的事実の集積によって徹底的に追及したものである。ここには一〇〇冊近い戦争の回想記から従軍慰安婦に関わる部分が抜粋され、それを戦闘地域別に配列し、慰安所の設置場所などの解説を付して構成されている。その顕著な特色は、将兵の直接的見聞に限ったこと、および日本軍の全戦闘地域の——中国、韓国、台湾はもとより、ルソン・スマトラの諸島に至るまで——慰安所の存在をくまなく網羅していることである。そのおびただしい量の証言は事実そのものの衝撃力に満ちている。

証言の多くは、上級将校たちの荒淫ぶりには批判の目を向けても、自らもまた加害者であるという意識は希薄である。そこに慰安婦からの聞き書きとのずれは歴然としているだ

ろう。が、淡々と事実を記したなかにも目をそむけるような朝鮮人・現地人慰安婦の惨状が語られ、日本人、あるいは男性への信頼感を根こそぎ覆されるようなショックを受ける。

「女は顔を横に向け、寝たままでラーメンをすすり、股をひろげている。兵隊は、ほんの五、六秒ですませ次の番」などとあり、これはまさに売春制度を肯定する男性の必読の書ではないかと思う。外国軍隊には存在しない。

田中 單之著

『三好十郎論』

著者は、序章、「人生相渉とは何か——十郎・芭蕉・透谷」において、三好十郎は「解放戦線上の一人の雑兵たらん事を最大の目的」とする姿勢を「いささかも崩」すことなく、「脱皮に次ぐ脱皮をもって」ついに「文学の高みへ登りつめて行った」と述べ、「透谷、芭蕉とは逆のコースを歩いて『人生相渉の文学』を織り成した」と最大級の評価を惜しま

い従軍慰安婦制度がなぜ日本には存在したのか。公娼制度を継続させた非宗教的・没倫理的性意識と、アジアの植民地・非占領地の民衆への差別意識がもつとも醜悪な形で結び付いたためではないだろうか。読後、さまざまな考察へと導く刺激的な一書である。

(こばやし ひろこ・文学部講師)

▽一九九四年・梨の木舎・一八五四円

▽著者 一九四八年卒

前田 角蔵

ない。

著者は、「あとがき」で明らかにされているように、若き情熱的な教師時代から三好十郎と個人的な交流をし、その『文学』『思想』と対話しつつ自己を形成してきた研究者である。民衆の問題、知識人の問題、政治と文学の問題、戦争と平和の問題は、三好にとって切実な問題であった。しかし、それ以上に、

著者にとってもまた切実この上ないものなのであった。本書では、『三好十郎』は単に語られているわけではない。語ることは、同時に著者自らのいきざまを語ることであった。そこには、著者自身が抱え込んで来たこれらの問題にある決着をつけようとする強い意志と情熱が溢れている。読む者に強い感銘を与えるのは何よりもまずこうした著者の姿勢ゆえである。

さて、本書の概略を示せば、I章では、まず、プロレタリア文学時代の三好の問題点が考察され、II章では、転向時代の三好がかなり批判的に考察され、III章では、戦後の知識人としての三好の独自の位置が考察されている。著者は、三好が「生れついでのアナキスト」であり、「最も虐げられた者の眼」を持つ反面、「その眼からしか現象を見ようとしないうる心」でもあったプラス・マイナスをしつかり押えている。本書では、この三好がどのようなにして、「真の知識人とは、たえずノイローゼにおかされつつも、どこへも脱出せず、それに耐えて病的なノイローゼにはならず、自分の属している社会全体をどんな種類の絶対主義にも渡さぬための抗毒素として存在し